

## 第4回日本臨床検査学教育学会学術大会

佐藤 健次\*

第4回日本臨床検査学教育学会学術大会が平成21年8月19日(水)~21日(金)の3日間、東京医科歯科大学で開催されました。昭和33年に衛生検査技師法が施行され、昭和34年から2年制の衛生検査技師教育が開始され、その後3年制臨床検査技師学校、短期大学、大学、大学院と教育体制が次第に充実され、本年50年の節目に当たりました。本学は昭和37年に衛生検査技師教育を開始、3年制臨床検査技師教育を経て、平成元年に国立大学で初めて医学部保健衛生学科として大学教育を開始して以来、順調に発展を遂げ、平成13年に大学院重点化大学に移行し、国立大学の先陣としての大学・大学院教育を行ってきました。本学術大会はこれまでの50年に亘る教育について考えるとともに、新時代に対応できる教育体制を視野に入れてメインテーマを「新たな50年への出発」としました。さらに、4年制大学の増加や大学院の設置など教育環境の変化を鑑み、サブテーマに「臨床検査の現場と連携した教育・研究体制の実現」を掲げました。臨床検査業務の高度化に伴い、日常検査の遂行のみならず、新しい臨床検査法や診断法の開発を担う人材、そして診療現場における管理職を担うための人材育成の実現についても議論を深めることを目的としました。

全国65校の養成施設の教員、大学院生、学部生および臨地実習指導者を含む総数334名の参加者がありました。

第1日目はシンポジウム、特別講演、教育講演

があり、夕方に日本臨床検査学教育協議会式典、その後、引き続き学会会員懇親会を行いました。シンポジウムは「臨床検査の現場と連携した教育・研究体制の実現」を主題に、短期大学、大学・大学院教育に携わる教員の立場から、伊藤昭三(東京文化短期大学)、窪田俊朗(東京医科歯科大学)、奥村伸生(信州大学)の3名の先生方、な

第4回日本臨床検査学教育学会学術大会ポスター

\*東京医科歯科大学大学院保健衛生学研究科 形態・生体情報解析学 k.sato.mtec@tmd.ac.jp



大会長挨拶

らびに臨地実習あるいは就職先の大学病院検査部管理者を代表して村上正巳(群馬大学)教授に、それぞれの考え方と取り組み状況を述べていただき、臨床の現場と連携する教育・研究体制の実現に向けて熱心に議論を深めました。特別講演は本学が教養部を有する特徴ある医療系総合大学のため、教養部長の和田 勝教授に「歯医学系大学の教養教育」の題で講演をいただき、臨床検査技師教育の教養教育という視点から、今後の参考になると考えております。その後「国際的学際的研究のリーダーとしての研究能力の習得」ができるよう実際に学生を指導しており、本年度日本臨床検査医学会学会賞(学術賞)受賞の小山高敏(東京医科歯科大学)先生による「臨床と大学院研究に基づく血液凝固活性化とその制御の解析」の教育講演を行いました。

教育協議会の式典は東京ガーデンパレスで行われ、三村邦裕理事長、文部科学省高等教育局医学教育課 川村 優様、厚生労働省医政局医事課の杉野 剛様、本学 大山喬史学長、大野喜久郎歯医学総合研究科長・医学部長の挨拶がありました。その後の会員懇親会は芝 紀代子副大会長(文京学院大学教授)の司会に始まり、会員出席者も多数あり、盛況かつ有意義な懇親会となりました。

第2日目はアメリカでの経験に基づく坂本秀生(神戸常盤大学)先生の「日本の臨床検査技師から

見たアメリカの臨床検査」についての教育講演があり、ランチョンセミナーはアボットジャパン(株)青木和夫様が「イムノアッセイにおける非特異反応」について話されました。午後には、神戸常盤大学 永尾暢夫教授のもと教員研修について2つのテーマを企画され、猪子英俊(東海大学)先生の「身体はゲノムの単なる乗り物か？」と細萱茂実(香川県立保健医療大学)先生の「臨床検査技師教育における情報科学教育の必要性」の講演があり、これにも多数の参加が得られ、その後に9臨床教育分野に分散し、イブニングセミナー分科会においても教員同士の熱気にあふれた意見交換が夜遅くまでなされ、大変盛況でした。

一般演題は学会2・3日目に発表が行われ、106題と多教育分野にわたり内容も充実してきており、学部学生さらには大学院学生の発表も多く、教員と学生による活発な議論もあり将来の教育・研究者として成長するよう期待しております。

最後になりますが、日本臨床検査学教育協議会の目的とするところと学術大会開催の重要性にご賛同、ご後援いただきました文部科学省と厚生労働省の両省ならびに本学の実行委員ならびに実務委員の教員に厚く御礼申し上げます。また、ご協賛いただいた関係諸団体に感謝申し上げるとともに、歯薬出版株式会社からは学会記念品の提供を受けましたことに重ねて御礼申し上げます。